「ふるさと春日井学」研究フォーラム

Forum for Furusato Kasugai Studies

「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ

『ふるさと意識なくして地域の創生なし』

会報

ＮＯ．32

2015.10.11発行

編集責任：河地　清

Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

第 32 回「ふるさと春日井学」研究フォーラム』

「ふるさと春日井学」研究フォーラム　第 2 回道風縁地巡検

京都北区杉坂小野町の「小野道風廟」と左京区の道風死所「雲居寺」跡を訪ねる

9 月 25 日（金）「ふるさと春日井学」研究フォーラム　第 2 回道風縁地巡検京都北区杉坂小野町の「小野道風廟」と左京区の道風死所「雲居寺」跡を訪ねる バスツアーを実施しました。明け方まで低気圧の影響で土砂降りの雨で、先行きが危ぶまれましたが、京都へ近づくに従って雨も上がり、日差しも見えるようになり快適な観光日よりとなり参加者 25 名は心配することなく一日を楽しむことが出来ました。

京都杉坂小野道風之廟前にて記念撮影

京都市右京区の北隣が北区で、ふつうの観光案内マップには載らない。京都市四条通を西に

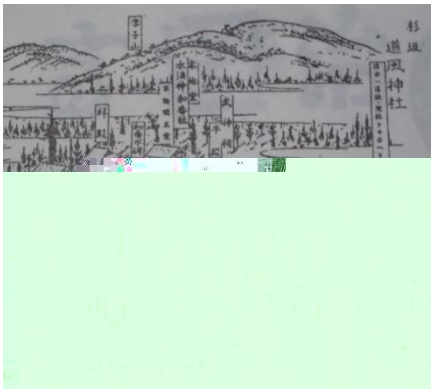
周山街道(162 号線)との交差点で西北に周山街道をバスは走る。高雄・槙尾・栂尾の「三尾」(さんび)と呼ばれる「京の里山」の地を抜けると**清滝川**の清流と**北山杉**の林立する風景が見られる。ここは秋の楓・紅葉の燃え立つ絶景が見られるところ。杉坂口で **31 号線**を東に入る。約 600m で**杉坂都町**の集落。東南へ 1500m 余で**杉坂道風町**の集落があり、「**小野道風廟**」入口に着く。かつては道風神社の近くまで国鉄バスが走っていた。「杉坂」バス停(上杉坂)は小野道風廟の 100m 手前であった。ここをまっすぐ進み右手(南)に折れると京都の町を見通せる**京見峠**を通り、大徳寺や金閣寺に出られる。観光バスは無理であるが、乗用車であれば通り抜けできる。

事前に宮川宮司に電話を入れ、どなたか案内を頼みたいと伝えたが、みなさん働いておられ案内は無理だろうと言われ諦めていた。四条通を走行中に携帯に電話が入り、すでに待っておられるという。杉坂都町の**尾島猛**さんと杉坂道風町の**金辻**(きんつじ)**進**さんが待っておられた。甘えさせていただき、現地の人ならではのお話をうかがうことができた。天候も心配したが、すっかり晴れ、快い山間の空気に包まれて「道風ゆかりの地」を拝観・見学できた。ここまで観光バスで来る人はないということであった。31 号線は旧街道で、生活道路・作業用の運搬道であり、対向車とのすれ違いには高い運転技術がいるが、東鉄観光の運転手の技量は確かで見事であった。安心して車窓から集落の家並みと北山杉を眺めさせてもらった。

Ⅰ． 杉坂の小野道風廟・道風神社の拝観

駐車場は 28 人乗りの中型バスが停められた。杉坂川に架かる朱の欄干のはでる**「思君橋」**より瀑布・滝を見る。漠社・滝社と呼ばれた道風神社の由来の滝は直前の雨でか水量が増していた。晩秋の秋、北山時雨の風情はいかなるものか、石の鳥居をくぐり、苔むす石段を約 100m 歩きながらその情景を想う。

「道風神社　由緒記」(昭和 37 年、宮司　宮川忠夫誌)によると、御祭神は小野道風朝臣。道風公が杉坂、**産土**(うぶすな)**神**和香社より湧出する、霊水を所望して、**宮僧**(きゅうそう、くそう)の宿舎たりし明王寺に業を修め、栄達の結縁(けちえん))により氏神に斎(いわ)い祀られた」とある。宮僧とは諸社の神宮寺、別当寺を管理した僧のこと。神宮寺は神仏習合思想に基いて建てられた仏教寺院や仏堂。神護寺・宮寺も同じ。問題は道風がその明王寺で何を修業したかだが不明だ。道風神社本殿(武大神祠)前の榊の巨木は西日本一の太さで神々しい。明王寺は明治 2 年、護摩堂とともに廃寺となり、仏具類は地蔵院に移されたが、文献・備品は散逸。諸仏は明治 16 年に地蔵院と法蔵院の 2 ヵ所に遷したという。



「由緒記」には皇室との関係が極めて深いものがあったとして、「大嘗会、その他皇室の御慶事には、当社より牛蒡・長芋を献上」したこと、「文化十年三月八日、後桜町上皇　道

風公八百五十年祭に付、翠簾一懸、三宝三具御寄進」の記録がある。文化 10 年は西暦 1813 年である。天皇からの下賜・寄進の記録もある。1962 年 4 月 15 日に式年祭を斎行している。

Ⅱ．和香社(本地堂、不動明王堂)と「和香水銘」の碑

下の写真は金辻進さんが**不動明王堂**の覆堂(おおぎどう、ふくどう、鞘堂ともいう)前で説明しているところ。金辻さんの後ろに「和香水銘」の碑が建つ。その碑の右手の石積みの水場がもともとの「和香水」の湧き出ていた所。今は涸れて坂参道の中頃の位置にある。今回、

硯滴にとペットボトルに入れて、この霊水を持ち帰られた墨客もおられた。

和香水の碑

「和香水銘」碑の**撰**は**大江資衡**(すけひら、1729-1792)は京都生まれの儒者で、はじめ石田梅岩に学び、のち詩と書法を龍草蘆(りゅうそうろ)に、書は宮崎筠園に師事した。詩社時習塾を開いた。碑の書は**近藤正信**(生年不詳-1805)は京都一条に住した。趙(ちょう)松雪に学び、楷書に長けた。碑の題字の篆字は望井沢善、どういう人か不明。建立は明和 7 年(1770)初夏。

*挹＝ユウ、くむ　*竭＝ケツ、つくす

*齎＝ヒツ　*爰=ここに、エン

*廼＝ダイ、ナイ　*邈＝バク、とおい　*稊＝テイ、ひこばえ

齎沸霊泉杉
阪之嶺維神爰臨令徳彰宣伏旱
魃廼利蜿蜒千歳雖邈蕨沢綿綿辟
公斯挹式粛式顕迄用竭万億稊
年明和庚孟夏　望井沢善興篆
大江資衡撰　近藤正信書

碑文

Ⅲ．道風神社の創建と道風を祭神とした理由、裏づけに乏しい説だが…

「道風神社　由緒記」に篁社のことが書かれている。「**小野篁**(802-852)の社、杉坂に在りと史書に見ゆるも、当社には何等の所伝もない。強いて推測すれば、道風公が明王寺に、修行中篁を斎(いわ)い祀(まつ)ったものと思われる。此の篁社に道風公を、合祀して以来道風公の名のみ名題となりしか」とある。

人文社『郷土資料事典　京都府　観光と旅』に次の記述がある。「小野道風神社の創建は延喜 20(920)年というが、明らかでない。本殿に小野道風、明王堂には不動明王を祀る。…当社ははじめ小野明神、または小野神社として、木地師が祖神と仰ぐ**小野宮惟喬**(おののみやこれたか)**親王**を祀ったものが、のち社名にちなんで最も知られた道風を祭神したといわれる。」小

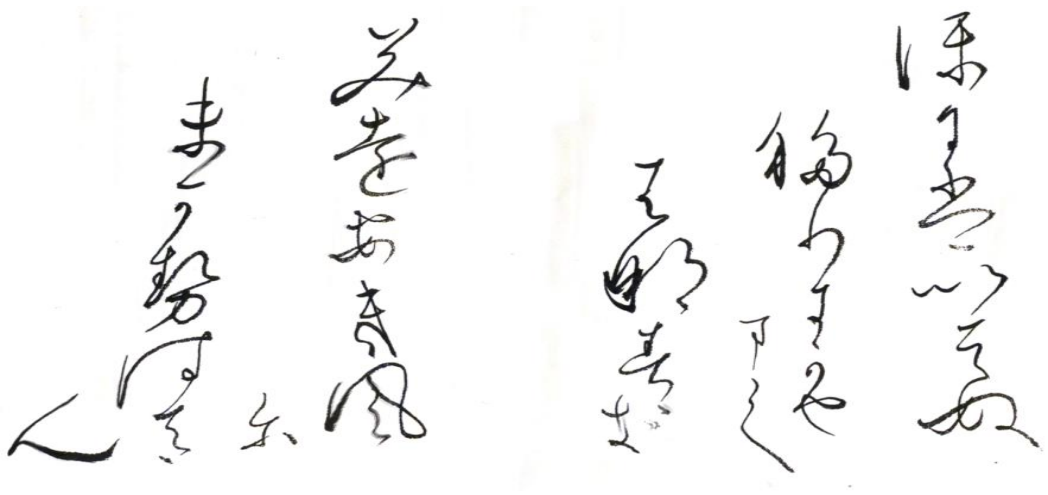
野宮惟喬親王(844-897、大宰帥、弾正尹)は文徳天皇(825-828)の第一皇子であったが、母(紀静子)が藤原氏の出身でなかったため、異母弟の惟仁(これひと)親王(母藤原明子、のちの清和天皇)が皇太子となると出家して大原の地に隠棲し、897 年に 54 歳で亡くなった。惟喬親王はロクロを発明し、「木地師の祖」といわている。和邇小野宮惟喬と呼ばれる。

Ⅳ. 小野道風が亡くなった雲居寺～高台寺に雲居庵の名を残すのみ

妙心寺花園園で昼食をとり、観光客の多い高台寺に行く。途中、二条城の南西に「大學寮」跡碑を見る予定だったが、見つからずやり過ごす。雲居(うんご)寺は八坂東院とも呼ばれた。

東山区下河原町にあった寺。創建は不詳桓武天皇の菩提寺と伝えられる。のち天治 2(1125)年に比叡山の僧瞻西(せんざい)が勝応阿弥陀堂を建て、これと本堂を雲居寺と称した。応仁の乱で焼け、のち復興したが、慶長 10(1605)年に高台寺が建立され、雲居寺は廃絶した。秀吉の正室北政所を助けて家康が創建した。雲居寺の遺物はなく、わずかに雲居庵という茶屋で抹茶を喫することで偲んだということだけがここでの体験であった。25 名のバス巡検は無事終了した。(記録：塚田忠)

ほにはいでぬ　いかにかせまし　はなすすき
　　みをあきかぜに　まかせはてゝむ



(河地栖雲　臨)

道風晩年の和歌です。臨書してみました。春日井市観音寺に保存されている道風の肖像画の上部に貼り付けられた「継色紙」に書かれています。道風の晩年の境遇を想像することができます。 (文責：河地清)

事務局：〒486-0825　春日井市中央通り 2-9　TEL・FAX0568-82-5973　会長　河地　清

mail address:kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

かすがい市民活動情報ｻｲﾄ：http://kasugai.genki365.net/

*ふるさと春日井学*検索